

ば元おこしいになるので、下働きの役目を引き受けること
に、おこさないことを申し添えておくしだいである。

編集室よりお書き

(おわり)

どうもご苦労なまじりました。費下りなされたお仕事、実は
史談会員が七八人努力奉仕でやるうと前から申入れまして
いたし、そのつもりでおりまいたが、でたらめにやってはか
えって後始末に困るし、勤めや家業の都合でとうとう
実施できませんでた。

一応の整理がつきまわって何よりです。大変な量の文化財
が、一度はどつと佐伯市に寄せられまいたが、一つ模範的
な資料室として、今後運営に期待申します。

古文書学習のことご提案下さりありがとうございます。従来
県立図書館主催の古文書解説講習会にどんなか会員が
出席と奨励し、実費の助成をしております。また市教委や
史談会の主催や共催やっています。今年度も計画し
ておきます。

お互いに、重宝な電子コピーによる古文書の複写の
際は、必ず何枚も余分にとつて、頑ち合つて、資料の研究
と読解に役立つように。

(お茶)

大化講義会 「佐伯文庫と毛利高標侯」 一月二十五日開催

元佐伯中學校教諭 梅本幸吉先生と、その教え子 学術会の皆さんの協
力をいただいて別府からお招きし、文化会館で講演会も催した。

主催した史談会の会員、それに教子たち、合せて三十数名の出席があ
り、極めて有意義であった。先生から発表されるとこもが極めて多かった。

小藩二方名の佐伯藩が、唐本、今冊を集めたこと、藩主高標侯の集書の見識
のすこぶる優れていたこと、その愛書 好學の態度の立派さ、まことに立派なまがて
頭がさがるばかりである。そしてその最終的変遷を本二冊。冊ばかりが、今
佐伯市(市教委保管)のものとなっている。嬉しい限りである

佐伯文庫は佐伯市が天下に誇つてよい貴重な文化財である。(お茶)

特別寄稿

秋月橋門と賀来飛霞

— 佐伯藩における

佐田式大砲鑄造について —

客員 大隈 米 陽

(宇佐郡安志院町且尻一九〇)

佐伯藩の懸望により、佐田の賀来家では惟徳の末子重
八郎惟舒を、鑄造主任として出張させた。橋渡りに成功
した秋月氏より飛霞宛の書翰に、

愈々御安静煩し奉り候。先達ては鑄砲の事御相談申上
候也。御取計にて御従弟御遣し下され、千萬好都合即
反射炉に取掛り申候。重八郎君も同じく日出・立石等
に仕掛りも有之候故、廿日計も取掛へ上げ其上にて罷
帰半とて、朔日より突足に候。早く御再来下され候様
御催促下さる可く候。

一夜夜京師より急飛到来、五月十日より夷賊御撃拂ひ
と御定めに相成る趣此(先)末如何と存じ奉り候。江戸表
にては夷船四十隻其一隻も港を出る事能はざる様、依
りて阻止有之との噂に御座候。実否未詳に候。

一橋公先月廿四日京師御駕御帰着に相成し由、或は云
江戸將軍は一橋公、京師の將軍は今の大樹と仰せられ
候と云ふ説もあり、飛語紛報未だ是非を知らざる也。
病後御病人如何為され候也。重八郎君より承り候へば
御容体相変らずの由一茶の治る路有之候半と、英々も
祈り候事にての儀家内よりも宣布申上候 草々

五月八日

劉龍

季和足下

とある。これは重八郎一行重大使命を帯びて、佐伯反射炉築造開始の第一報であり、日出や立石藩でも引受け鑄造の拳があったのではないか。劉龍は秋月橋門の号で大可成は小相とも称したのである。

幕末国歩艱難、中央の政局緊迫の状況一々指し得べく、京師の急飛（五）十五日外国船打撃を報じ、十四代家茂將軍上京、慶喜東歸、続いて文久三年八月の大和行幸となり、十八日の政変となり公武一体、尊皇攘夷と飛語紛々、結果如何と手に汗した志士の面影か目に見える様である。

秋月氏がこの重大時局に對死すべく、国防第一と大砲鑄造に肝胆を砕いた心状樹すべきものがあるわけである。次の様な書かんもある。

貴書拝読、春寒料峭愈々御安静賀し奉り候。当方無事御省念下さる可く候。

今般孫一君御苦勞下され候趣、未だ御拜願得ず候も、大砲鑄造相成度く存じ奉り候。西洋砲説追々之を承る可く候。芳山の風聞旧冬以来之を承り候。其詳なる事は未だ知らざるも長光太郎は僕の旧知識、禍に罹り候は憐れ可し。何卒一命を失はざる様之あり度存じ奉り候。御老母様御不測之由随分御大事に御介抱成され候様存じ奉り候。

江戸城火災実事と存せられ候。突に恐入候儀に御座候。浪人は何れにか齎まりし由、浪人は二葉あり一は義浪人一は偽老人と申す説あり、偽は米藩人多く之に加はると承り候。天下の形勢未だ何とも不可と東藩の説確実と存じ奉り候。但し当今天下多事、諸物高く候。貧民困窮、諸侯罷弊、其他は僕能く知らず候。草々頓首

二月五日

劉龍

季和足下

此書翰によれば惟熊の二男孫一（惟準）も佐伯迄出かけて指導したらしい。指導監督の爲である事勿論である。佐伯藩元米富裕資材も豊富であるから、大砲鑄造の業も順調に進捗したらしい。かくして約二十門の大砲が出来た訳である。この壯拳の橋渡しは橋門と飛霞両氏の功を第一に挙げねばならぬ様である。この三通の書状を熟読すると、両氏の交遊の深さや天下の形勢を憂える烈々たる当年志士の心情が、賑々として紙表に躍っている。

却説序で乍らこの時鑄造した大砲の行方はどうなつたであらうか。佐伯藩も他藩と同様明治維新後廢物として処理されたかも知れないが、昭和十七年一月八日の大坂毎日紙上に、

火銃銃も志召……古銃回収に

佐伯市大手又阿南卓氏の祖先は旧藩主毛利家の砲術指南を勤めていたが、この家室とも云ふ可き大砲や火銃銃を、銃の回収に忘すべく五日土蔵から取出して来たのである。

阿南氏の弁によると

この大砲は火銃銃は嘉永年間鑄造されたもので、てうど米繼がわが浦賀を存やかした頃のものです。それが今度立場をかへて米國擊滅の弾丸になる訳である。その記事が載っていた。当時鑄造された大砲の現物が発見された事により、この拳の傍証資料として極めて貴重なものとなつた次第である。

大分県教育会編「大分県偉人伝」に秋月氏の小伝が載つており要を得て纏っている。

橋門は日向高鍋藩主秋月氏の支族とあるが、名門の出である。高祖父兄弟故あって高鍋を去り日州下庄に定住

したが、後帰参の命あり兄は帰り仕えたが弟は帰らず、その四代の孫が即ち橋門の父である。

橋門名は龍、字は伯起、小相とも称した。文化六年生る。年甫めて十六、日田咸宜園に広瀬淡窓に就いて学び、居ること数年、昨の郡代で名君と云われた塩谷大四郎の意に背き一劍飄然、佐伯に來り中島子玉の家へ仮寓した。後筑前の龜井昭陽に学び、天保二年年廿三、惟を肥州島原に下して子弟を教授したが、折から島原株葉中の賀来飛霞と相知り、爾来厚い交りをつなぐたのである。飛霞の郷里豊前佐田は島原藩松平侯の飛地であった。

幾許ならず島原を去り、備前の医(万里の門人難波立達か)について学ぶ事三年、三都に遊び後郷里に帰り医を業とし、治を乞う者頗る多かつた。延岡内藤侯その名声を聞き、招致せんとしたが志になかつた。会ま佐伯藩主毛利高泰学を好み士を愛し、橋門を聘して藩学教授に任じたのである。ついで高謙の時侍講に任じ時々献替の功があった。「時々を諮問するに、忌諱を避けず裨益する所多かりき」とあるから、大砲鑄造の事を奨められたに相違ないと思ふ。

明治元年、徵されて三河県知事に任せられ、同年十二月葛飾県知事に転任した。同十三年東京で病没した。六十二才であった。

橋門人と為り嚴毅方正、見る者肅然として畏敬せざるはなかつた。民物を愛養し、俸祿の餘は悉く以て郷党貧窮及びその恩人に頒ち、致仕して後遺産は残っていないかたたと云う。

父母に仕えて至孝、家を治る嚴肅、平易和易、喜笑以て楽しんだ。詩文流暢にして雄揮、筆札に巧みに、和歌に秀で日々文酒徵逐、又世事を云わず、天下の憂を以て我が憂とした。

大分県偉人伝では橋門を学者教育者として伝しているが、文人にして又熱烈なる愛国の志士としても尊敬すべき人と思ふ。

佐伯藩臣であった頃飛霞の懇囑を受けて、彼の佐伯文庫中の支那及び各府県志及び本草鳥獸花木圖譜の目録を書き送っているが、それが三十四種二百五十三冊に及んでいる。飛霞が橋門の手引きによって佐伯文庫蔵本に目を通したか否か未詳であるが、その本草研究の手が佐伯文庫本にまで及んでいた事は確実である。

尚、延岡に於ける本草研究及び明治十一年飛霞が上京して小石川植物園取調係として、尾張の本草大家伊藤圭介と共に研究に廣心し、折から葛飾県知事であった橋門とその交遊が更に深まってきたのであるが、それらは稿を改めて引続き發表する機会があると思ふ。

今回、羽柴主筆のおすすめで、まともな採掲載してもらい貴重な紙面を埋めた点は恐縮であるが、その結果反射炉趾が佐伯市と久部であり、大砲試射は女島新地の台場(今の木根団地付近である)との御教示を得て、更に興味を増加するを覚えた。

筆者は先年佐伯城山に園木田独歩の文学碑や文献を探り、関心を深めている。現在市在住の元警察署長で、現在実業界に活躍中の佐藤豊氏は佐田出身で、莫逆の友である。又、佐田賀来家は橋門及びその子息新太郎より、飛霞宛の書翰が數十通蔵されているので、続稿掲載をお許し願えれば幸いである。(此項完)

ゆ 本会賛助会員、中央タクシー社長

編集者より

本章著者賀来飛霞と、佐伯藩の代表的漢学者秋月橋門との交友、きわめて興味ふかい。どうか引き続き原稿を、惠賜下さるよう。(羽)